

洪水から東京を守る荒川放水路と、その重要施設「岩淵水門」の建設を主導した青山士。  
関東大震災を目の当たりにし、「東京大学」で建築の防火・耐震性能の研究に意欲を燃やした内田祥三。  
自然の脅威から人々の生命や生活を守るため、技術の発展、制度の刷新に挑んだ技術者たちがいた。

# 偉人伝

the life of a great person

土木  
建築

VOL.10

建築

「一八八五年～一九七二年」

## 内田 祥三

Yoshikazu Uchida

関東大震災を経て  
防火・耐震建築の  
研究に尽くした



内田祥三は1885(明治18)年、東京都に生まれる。1907(明治40)年、東京帝国大学建築学科を卒業。卒業後は約3年間、三菱合資会社で設計職に就く。その後、大学院に戻り、佐野利器のもとで鉄筋コンクリート構造の研究に勤む。大学院卒業後は同大学で建築構造学の教鞭をとり、1921(大正10)年に教授就任、1923(大正12)年には営繕課長を兼務した。同年9月、関東大震災が東大キャンパスを襲い、煉瓦建造物の多くが倒壊、連鎖的な火災で18棟が全焼した。内田は「キャンパス復興の建築実務を担当講義の一部として行う」という条件のもと計画を担当。新校舎には、延焼を防ぐために建物間に空地を設け、耐震性に優れた鉄筋コンクリート構造を採用した。安田講堂をはじめ、ゴシック様式で統一された建物群は内田ゴシックとも呼ばれ、現在も往時の姿を留めている。

内田は防火・耐震建築の研究を深めるとともに、1919(大正8)年に公布された市街地建築物法や都市計画法にも携わり、建物や都市の安全性向上に尽力した。

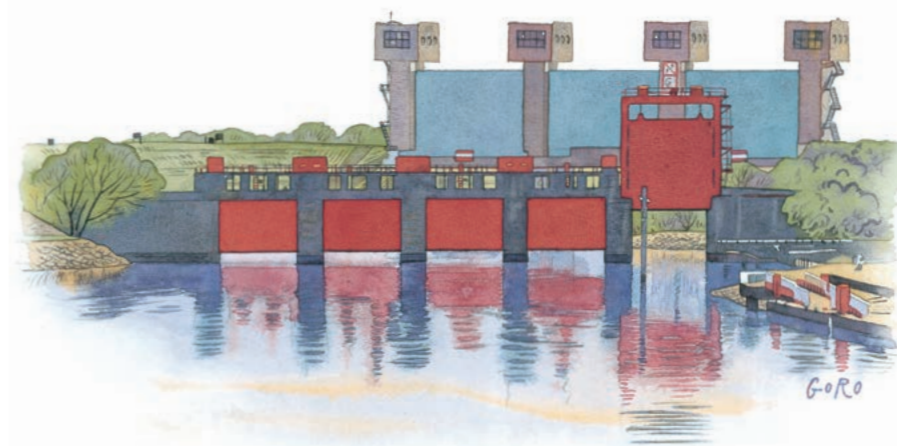
土木

大洪水の脅威から  
生命を守ることを  
使命とした

## 青山士

Akira Aoyama

「一八七八年～一九六三年」



青山士は1878(明治11)年、静岡県に生まれる。第一高等学校時代、内村鑑三の「子どもや孫のためになるような仕事をするこそ人生の生き甲斐である」という考えに感銘を受け、土木技師になることを決意。1903(明治36)年、東京帝国大学土木工学科を卒業するとパナマ運河工事に従事するため、主任教授であった広井勇の紹介状を手に単身渡米。翌年より7年半にわたり、日本人唯一の土木技師としてパナマ運河工事に携わった。1912(明治45)年に帰国した後は内務省土木局で内務技監を務め、度重なる大洪水で人々の命と生活を脅かしていた東京・荒川の治水事業に参画する。青山はパナマ運河で得た知見を活かして幅500m、全長22kmの人工河川工事を指揮した。荒川と隅田川を分流する岩淵水門は、川底から20m下まで続く強固な基礎を構築。水門は工事の間に起きた関東大震災にも耐え、荒川放水路は1924(大正13)年に竣工した。

青山はその後も信濃川の大河津分水路や鬼怒川の改修工事など幾多の治水事業に従事し、後世の役に立つものをつくるという初志を貫いた。